
朋友

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朋友

【Nコード】

N9845E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

名門袁家に生まれながらもその出自故に疎まれている袁紹。宦官の家であるが為に除け者にされていた曹操。二人の若き日の友情は。実はこの二人は出自で悩んでいて演義とは随分性格が違っていたようです。

第一章

朋友

名門の生まれだとされている。一応は。

しかし彼は偉くなれない。それには確実な理由があった。

「わしは一族の中では余計な者よ」

酒場で仲間や取り巻きの者達に対していつも語っていた。それも自嘲を込めて。そのうえでまずい酒を飲んでいた。

彼の名前は袁紹、字を本初という。名門袁家の人間であり背が高きりつとした見事な顔立ちをしている。周囲から目を引かずにはいられない姿形であり馬や剣も得意でまた学問にも通じていた。そんな彼であるが出世できない確かな根拠があったのだ。それが何かという。

母親に関係があった。彼の母はあまりいい家柄の出ではなかった。所謂側室の子であった。彼の父も一族の中では左程出世してはおらず一族の中では疎まれていた。また彼もそれを気にして都洛陽で無頼漢達と交わりお世辞にもいいとは言えない日々を送っていた。

「そんなに悲観することでもあるまい」

友人達はよく袁紹を慰めて声をかけた。取り巻き達も。

「仮にも袁家だ。それ程悪くはならんさ」

「そうだな、貴殿の実力なら尚更」

「そう上手くいくものか」

しかし彼は周りのそんな言葉にも気を晴らすことはなかった。寂しく笑ってこう言うのが常だった。

「叔父貴も誰も見るといえば」

「袁術か」

「そうだ、あいつだ」

忌々しげに言う。袁術は彼の従弟であり袁家の中では直系であった。それなりに実力もありまた野心家でもあった。傍若無人で好色、

贅沢を好むところがあつたがそれでも袁家の人望を一身に集めており将来は国の最高職である三公になるとまで言われていた。袁家はこの三公を四代に渡って輩出している漢王朝の名門なのだ。しかし彼はその名門の中で疎外されている立場だったのである。袁術とは違つて。

「公路とは違う」

袁術の字である。

「わしはな。どう頑張つても偉くはなれないさ」

「三公までもか」

「なれる筈がない」

首を横に振つて答えるのが常だつた。

「所詮な。わしは飼ひ殺しの身分を」

「まあそう言うな」

「貴殿は立派だ。一旦身を起こせばきつと」

「そうなればいいがな」

いつもこんな話をしていた。そんな彼は都では無頼漢に近いと思われていた。しかしその彼にも友人がいた。彼より年少だが実に気があつた。その友人の名を曹操という。

彼の字は孟徳という。鋭利な整つた顔立ちをしておりその目の光は鋭く強いものだ。背は普通であり紹よりは小柄だ。彼は漢王朝の創業の臣曹参の子孫だが祖父は宦官で父はこれまた創業の臣の家夏侯家の者である。そこから養子に入つたのだ。本来ならば名門であるが彼もまた出世できない理由があつた。それは祖父が宦官だからだ。当時は宦官は皇帝の側にいることをいいことに国政を壟断し私腹を肥やす存在とみなされ忌み嫌われていた。実際にそうした者が目立ち国を憂える官吏や士からは憎悪されていた。その家の者である彼も出世できない確かな理由があつたのだ。

曹操はその出自の為孤立する立場にあつた。だが袁紹はその彼とも分け隔てなく接し友人としていた。元々そうしたことにはこだわらない男だつたがそれ以上に己と似た立場にいる彼に親近感を覚え

ていたのだ。それでよく共に遊び共に飲んだ。悪事さえ共に働くこともあった。

ある日のことだった。都のある飲み屋で二人で酒を飲んでいる時だった。曹操は不意に袁紹に声をかけてきた。

「なあ本初」

「何だ孟徳」

お互いを字で呼び合って話に入った。既に酒はかなり進んでいる。二人は杯をそれぞれの手に持ち向かい合いながら話をしている。

「御前はわしを嫌ってはいないな」

「当たり前だ」

袁紹は当然といった様子で彼に答えた。

「何故嫌う必要がある。御前は性格もいいし頭も切れる」
だから評価しているというのだ。

「側にいてくれて頼りになる。そんな御前をどうして嫌うのだ」

「わしは嫌われているからな」

曹操は口の端を歪めて自嘲を込めて言った。

「だからだ。特に御前の従弟の」

「公路のことは気にするな」

こう曹操に告げた。一杯飲みながら。

「あいつは名門意識が過ぎる。どうせ宦官の孫というだけで御前を嫌っているのだろう」

「その通りだ」

曹操は素直に答えた。

「面と向かって言われたこともある。わしは卑しい宦官の孫だとな」

「馬鹿馬鹿しい」

袁紹はそのことをそれだけで済ませた。

「だから何だというのだ」

「御前は違うのだな」

「それを言えばわしは妾腹よ」

自らのことを言う。

「あ奴はわしをこう呼んでおるわ。一族の恥とな」

「一族のか」

「叔父貴も他の一族の者もだ。幼子までわしのことをそう呼ぶ」

それだけ彼は一族の間では疎まれていたのである。それに対して袁術は、というわけである。彼を庇う者は一族にはいなかったのだ。

「誰もがな。わしは一族の鼻摘み者よ」

「名門袁家の出であつてもな」

「名門！？わしにはあまり関係のない話だな」

曹操に返した言葉はこれだった。

「全くないとは言えないがな。それでも」

「皆公路を見ているのか」

「あいつの母は立派だった」

本人ではなく母のことを言うのだった。

「おかげであいつは一族の華よ。確かにそれなりの力はあるがな」

「力は御主の方が遥かにあるだろう」

「それを言えば御主もだ」

袁紹は今の曹操の言葉をそのまま本人に返した。

「武芸だけでなく学問も詩も何でもできるではないか」

「些細なことだ」

「孫子のあれは続けているのか」

「うむ」

曹操は趣味のようなものとして当時から有名だった兵学書孫子の注釈を行っていた。これは今にも残っている。彼の功績の一つだ。

「時間を見てな」

「見事なことだ。普通はできぬ」

「それでもな。わしも」

「宦官が何だというのだ」

袁紹はまた言った。

「御前の祖父殿のことは知っている。だが御前は」

「違うか」

「御前は御前だ」

一言で言い切ってみせた。

「御前は曹操孟徳だ。それ以外の何者でもない」

「では御前も袁紹本初以外の何者でもないぞ」

曹操もまた袁紹にそのまま言葉を返した。

第二章

「それ以外の何者でもな」

「そうか」

「そうだろう。わしが曹操以外の何者でもないというのならな」
彼は言ったのだった。

「そうなるのが道理だ」

「言われてみればその通りではあるな」

「少なくとも御前は少し世に出てみればいい」

「世にか」

「そうだ」

曹操はそれを袁紹に勧めてきた。

「その叔父上殿だが。そんなに御前を邪険にしているのか」

「挙句には御前と付き合うのも止めろとか言っておるわ」

袁紹はそのことも曹操に告げた。

「鬱陶しいことにな」

「さもあらん。所詮わしは宦官の孫」

曹操の言葉に自嘲がこもる。

「当然だな。そうも言われる」

「何度も言っているがわしは御前が宦官の家の者だろうが何だろうが構わん」

しかし袁紹は曹操のその自嘲を打ち消した。彼にとっては本当にどうでもいいことだからだ。

「御前を人間としても好きだしその才能も素晴らしいと思っているからな」

「褒めても何も出んぞ」

「それはわしも同じだ。何も出はしないさ。だが」

「だが、か」

「誰に何と言われようが付き合うのはわしだ」

そのことをはっきりと告げてきたのだった。

「だからよいのだ。最初から気にしてはおらんさ」

「そうか」

「そうだ。それでその叔父貴だが」

「何と言っておるのだ？」

「官職に就けと言ってきておる」

「官職にか」

「適当な職を用意してやるとのことだ」

漢代は貴族的なものが強くあった。その為一族の者を官職に推挙することが多かったのだ。名門である袁家ならば当然の話であるしまたそれはそれなりの地位が最初から期待できるものだった。

「そう言ってきておる」

「では受けてはどうか」

「受けよというのか」

「そうだ。結局のところ御前はこう思っているのだ？」

また袁紹に尋ねてきた。

「またとは何だ？」

「だからだ。妾腹と軽く見ている一族の者をだ。どう思っているのだ」

「ものの数ではない」

一言で答えた。

「そんなものはな」

「では官職に就け」

曹操はまた言った。

「わしも今それを勧められているしな」

「何だ、御前もか」

「父上が五月蠅いのだ」

曹操の父もまた政治の世界で大きな力を持っていたのだ。とりわけその富が有名であり曹操もそれにより何不自由ない生活を送ってきている。そうした意味でも二人は似ているのだった。

「そろそろ真つ当な官職に就けとな」

「では就いたらよからう」

袁紹の言葉は先程の曹操の言葉そのままだった。

「御前のその才はそれでこそ大きく世に出る」

「わしが今さっき言ったことと同じではないか」

「むっ、そういえばそうだな」

「そうだ。同じで」

こう袁紹に言って笑ってみせる。

「何もかもな。それを考えればわし等は世に出るべきか」

「そうだろうな。太平の世だが」

この時代はまだそうだった。二人の若い時代は。

「官に就くとするか」

「袁術は怖いかな？」

「いや、全く」

袁紹の言葉は何でもないといった様子だった。

「そんなものはな。全く怖くはない」

「ではそれで問題はない。御前はすぐに袁術を越えられる」

「公路をか」

「問題ない。わしもあの男なぞ軽くあしらってみせる」

袁家のプリンスとも言うべき存在で将来は三公かとも言われている男も歯牙にかけない。やはり曹操にもそれなり以上の自信があるということだった。

「それだけだ。わしも大きくなってみるか」

「わしもな」

袁紹はそれに応えて言った。

「大きくなってみるか。妾腹なりにな」

「宦官の孫なりにな」

二人は酒場でこう言い合いそれから程なくして用意された官職に就いた。二人は忽ちのうちに頭角を表わし袁術なぞ問題にならない位にまでなった。その後起こった黄巾の乱も宦官の専横も収め二人

の時代がはじまるかと思われた。二人の勢いはそこにまで至っていた。しかしであった。

袁紹は洛陽に入り専横を欲しい俥にする董卓と対立した。宮中で互いに剣を抜き合いがみ合うまでになった。百官は皆戸惑うが曹操はその中で一人袁紹の背にいた。そして彼に問うのであった。

「いいのだな、あの男は手強いぞ」

「構わん」

しかし袁紹は臆することなく曹操に答えた。その目は毅然として董卓を見据えている。

「この男、許すわけにはいかん」

「許せぬか」

「その欲が許せぬ」

彼が許せぬのは董卓の欲だというのだ。

「その為に全てを奪おうとする。わしはこの様な男と共にはいられぬ」

「倒したいか」

「だからこそ今剣を抜いているのだ」

袁紹も堂々たるものだ。しかし董卓のその身体はそれ以上だ。肥満こそしているもののその腕は太くまた恐ろしいまでに大きな身体をしている。まさに巨人だ。袁術を見れば部屋の端で震えている。

袁紹、曹操とはとても並べられないのは誰の目から見ても明らかだった。

「ここだな」

「わかった」

曹操はまずは袁紹のその考えを受けた。

「ではここは剣を収めろ」

「何っ!？」

今の曹操の言葉に顔を顰めさせる。そのうえで横目で彼を見た。見ればいつも通り至極冷静な顔をしている。その顔での言葉だった。

第三章

「剣を収めろというのか」

「董卓を倒すのはこの場ではない」

「この場ではないか」

「そして剣でもない」

剣でもないと言う。

「兵だ」

「・・・・・・兵か」

「剣である男には勝てぬ。尋常なものではないぞ」

「そういえば匈奴達と常に五分以上に渡り合ってきたそうだな」

「あの男は戦場で生まれ育った男だ」

曹操は董卓をこう評した。彼は生粋の武人であり若き日は馬に乗り左右に弓を置きそれを交互に放った。両利きであったのだ。それだけではなく一度の戦場で何十人も斬ることなぞ普通だった。戦場の血の中でのし上がってきた、そうした男なのだ。だから曹操は言うのだ。

「だからだ。止めておけ」

「わかった。兵だな」

「そうだ」

また袁紹に答える。向かい側の董卓は凄まじい殺気を放っている。百官が恐れ戦くその殺気の中で二人だけがそれに対する中での話だった。

「わかったらここは退くぞ。いいな」

「・・・・・・うむ」

袁紹は曹操の言葉に静かに頷いた。そのうえで剣を収める。すると董卓もここでは大人しく剣を収めたのだった。宮中であることを思い出したのか。

「覚えておれ」

「そちらこそな」

両者は最後に互いを見据えつつ別れた。袁紹は曹操と共にその場を後にする。宮中の廊下を進みながら曹操は彼に声をかけてきた。

「これからどうするつもりか」

「御前が言ったではないか。兵を挙げる」

袁紹は前を見据え早く歩きつつ曹操に答えた。曹操もまた同じ速さで前を見据えている。

「その為に一旦都を出る」

「そうか、わかった」

「孟徳」

袁紹はここで彼の字を呼んだ。

「何だ？」

「御主はどうするのだ」

今度は彼が問うのだった。

「兵を挙げるのか」

「無論そのつもりだ」

曹操もまたそれに答えたのだった。

「父上のところに戻る。そしてそこで家の財産を使って兵を集める」

「そうか」

「それで御主は南皮だな」

「うむ、まずはそこに戻る」

今の袁紹の基盤とも言える場所だった。袁家は都だけでなく各地に力を持っている。河北でかなり豊かなその南皮は袁紹の基盤になっていたのだ。

「そしてそこで兵を集めて都に向かうつもりだ」

「そうだな。だがここぞだ」

「ここで。何だ？」

「我等だけでは心許ない」

彼は言うのだった。

「諸侯を集めようぞ」

「諸侯をか」

「そうだ、彼等を集める」

曹操はむべもなくこれを言った。

「そしてその上に立ちな」

「わしが上に立つのか」

「御前なら充分だ」

曹操はこう袁紹に告げた。

「充分過ぎる程だ」

「また買い被りを」

しかし当の袁紹は。曹操のその言葉に対して苦笑いを浮かべるのだった。その苦笑いでまた言う。

「わしが盟主になれるものか。公路もいるのだぞ」

「何、それは容易い」

だが曹操はそれでも言う。

「御前ならばこそだ」

「そうなければいいがな」

「ではまずは南皮に戻るがいい」

「うむ」

「諸侯への激はわしが用意しておく」

筋書きを書くのは自分というわけだ。袁紹は曹操の手際のよさを耳にして内心感嘆せずにはいられなかった。やはりできると感じたのだ。

「御前はそれに乗ってくれ。いいな」

「わかった。それではだ」

「然るべき場所だな」

「うむ、また会おうぞ」

「またな」

二人はまずは別れた。そうして兵を集めそのうえで曹操が激を飛ばした。すぐに董卓のあまりもの専横に反発する諸侯が二人の下に集った。その中には袁術もいた。曹操はそこで諸侯に対して言う

のだった。

「まずは皆様方」

「うむ」

「何でござろう曹操殿」

どれも名の知れた男達だ。名声も力もそれぞれかなりのものだ。袁紹と曹操はその彼等を前にして立っている。そのうえでの曹操の言葉であった。

「まずは集まって頂きかたじけのうございます」

「いや、これは当然のこと」

「全ては帝の為」

「民の為」

「国に害を為す董卓を討たんが為」

諸侯達は口々に言う。それぞれの思惑があるがここではそれを仮面の下に隠してこう言う。これについては袁紹も曹操も最初からわかっていたのであえて何も言わなかった。そのうえで曹操の話が続く。

「まずは我等の盟主を決めたいのです」

「盟主をか」

「左様。ことを為すにあたっては頭が必要」

もっともらしくこう切り出す。

「都からあの董卓を討ち漢に平穏を取り戻すにあたってもそれは同じ。だからこそです」

「ふむ、確かに」

「その通りだ」

諸侯達は曹操のその言葉をまずはもつととした。

「曹操殿の仰る通りだ」

「頭がなくてはどのにもならんな」

「それです」

曹操はここでさらに話を続ける。袁紹はその横で聞いているだけだ。だが萎縮したりなぞせず堂々とした様子で話を聞いている。そ

れに対して袁術はどうにもそわそわとした様子だ。無論二人のこの様子も諸侯達の目に入っている。そのうえで考えられている。

「それはどなたが宜しいでしょうか」

「誰か、か」

「そうです。それが問題です」

曹操は言うのだった。

「皆様はどなたが宜しいと思われませんか」

「そうだな」

「そう言われると」

自分達ではどうかと思ひ名乗り出る者はいなかった。流石にこの場でその凶太さを発揮できるような豪傑はいなかったのである。

それで彼等は迷っていた。その間袁紹は一言も発さずやはり堂々と立っているだけだ。隣には先程盟主の話を出した曹操が控えている。そして袁術はやはり。やけにそわそわとして落ち着きがない。時折妬ましい目で従兄を見ている。そんな彼等を見て諸侯の一人が遂に口を開いた。

第四章

「そうだ、袁紹殿だ」

「袁紹殿か」

別の一人がそれに続く。

「そうだ、袁紹殿ならばどうか。まず実績がある」

「そうだな」

既に都で官職にあった折に様々な功績を挙げているのだ。黄巾の乱での功績もそこにある。

「そしてだ」

「そして？」

「四代に渡って三公を務められた家柄だ」

「袁家のだな」

「そうだな、確かに」

次に家柄が語られた。まずは実績とそれに伴う力、続いて家柄だった。その間誰も同じ袁家である袁術を見ようとはしなかった。

「我等の盟主に相応しいと思わぬか」

「そうだな、確かに」

「袁紹殿しかおられぬ」

「では決まりですな」

彼等の言葉を聞いたうえで曹操が口を開いてきた。その時にちらりと袁術を見る。いじけた顔で袁紹を見ているだけで何も言えなかった。

「袁紹殿で決まりです」

「それが宜しいかと」

「異存はありません」

まずは殆どの諸侯が応える。しかし袁術だけは黙っている。曹操は今度はその袁術に対して声をかけた。全ては計算のうちであった。「袁術殿はどう思われますかな」

「むっ!？」

曹操はここでその袁術に声をかける。すると彼は驚いた顔と声を見せた。その瞬間諸侯も彼に視線を集中させる。見事な演出だった。「袁紹殿で宜しいでしょうか」

「よいのではないか」

忌々しげな顔で顔を背けながら答える。

「それで。お歴々が認められるのなら」

「そうですね。それでは決まりですな」

「はい、ではこれで」

「我等の盟主は袁紹殿で」

皆曹操の言葉に応える。これで話は決まりだった。それが全ての将兵の間で袁紹自らの口で告げられると歓声が起こる。これで完全に袁紹は盟主となったのだった。

盟主になった彼は集っている将兵達の中を歩いていた。誰もが彼を褒め称えている。その横には曹操があり袁紹はその彼に声をかけていた。

「まさかな。こうも上手いくとは」

「当然の結果だ」

しかし彼は平然と袁紹に答えた。

「これもな」

「当然か」

「そうだ。前に言ったな」

「うむ」

曹操の言葉に頷く。

「袁術などものの数ではないと」

「だがこうも簡単にな。決まるとは思っていなかったぞ」

「家柄を考えればか」

「そうだ」

やはり彼はそれを言うのだった。だが語るその顔は憂いのあるものではなかった。しっかりとした強いものだった。その声もまた。

「やはり。それは大きいだろう」

「確かに大きい」

曹操もそれは認める。

「袁術は名門袁家の貴公子中の貴公子だからな」

「そうだ。わしとは違う」

同じ袁家であつてもそうなのだった。

「だからあの男が名乗り出ればわからなかったぞ」

「名乗り出られる筈がない」

しかし曹操は言い切った。

「そんなことがな。できるものか」

「できなかったか」

「そうだ。御前だからだ」

曹操は言うのだった。袁紹に対して。

「袁術は御前には勝てない」

「袁家の名声はあの男に集まっけていてもだな」

「御前自身の名声はそれよりも上だ」

曹操は前を見据えていた。前を見据えながら語っていた。

「袁家の名声よりもな」

「そうか」

「御前の力だ」

こうも言った。

「御前の力による名声なのだ」

「わし自身の」

「確かに御前は袁家の者だ」

それも言う。

「そして妾の子だ」

「言いくいことを次々と言うな」

「何、わしも宦官の孫」

自らのことも言ってみせるのが流石と言えた。

「同じよ。そうであろう？」

「まあな。確かにそれはそうだ」

「しかし、御前は御前だ」

やはり前を見据えたままの言葉だった。

「御前自身であることは誰も否定できない」

「では皆はわしだからこそ選んでくれたのか」

「そうだ」

ここでもまたはっきりと告げた。

「御前だからだ。御前がわしだからこそ友人としてくれたのと同じだ」

「同じか」

「だからだ。袁術なぞ最初から問題ではなかった」

また袁術を話に出してみせた。

「御前にとってはな。これからも」

「これからもか」

「御前と比べられるのはこの世で一人だけだ」

「一人だけか」

「そうだ」

言い切ることが続く。

「一人しかない」

「そうか。それではだ」

話の必然だった。袁紹はその一人に興味を持ったのだった。そのうえでまた彼に問うた。

「その一人とは誰だ」

「知りたいか」

ここで曹操の口元が微かに綻んだ。それは袁紹にも見えた。

「それが知りたいのか」

「そうだ。董卓か」

これから倒しに行く相手だ。彼の名が出るのは必然だった。

「それは」

「あれもまたかなりの男だ」

悪ではある。しかし悪を為すにはそれなりのものがなくてはならない。そうした意味で悪を極めるあの男はかなりの人物なのである。

「しかしだ。御前には劣る」

「では一体誰だ」

あの男を否定されては袁紹もわかりかねた。眉を少しいぶかしげに歪めさせた。

「あの男でないとすると」

「その男は」

「うむ、その男は」

「ここにいる」

やはりここでも口元が綻んでいた。

「ここにな。これでわかるか」

「ふむ、そうか」

袁紹もそれを聞いて己の口元を綻ばせた。全てを理解した笑みだった。

「そういうことか」

「そうだ。それを忘れるな」

曹操は前を見据えたままでの言葉を続ける。

「御前に対することができるのはこの世で一人だけだとな」

「うむ、よくわかった」

袁紹も前を見た。二人は互いに前を見据えつつ言葉を交えさせる。

「ではわしもこれから」

「その一人と対し続けるのだな」

「この命ある限りな」

二人の前には太陽がある。巨大なそれは黄色い大地を照らしている。二人はその光を正面から受けていた。二人並んで。毅然として受けているのだった。互いに並び合い。

朋友 完

2
0
0
8
·
5
·
1
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845e/>

朋友

2010年10月8日15時04分発行